

「インドネシア・スラウェシ島の魅力」(平成28年10月)

インドネシアは、アジア有数の大国です。面積は日本の5倍で、人口も2倍です。それぞれ、世界で14位と4位になります。1万を超える島々から構成されていますが、本学の交流先であるハサヌディン大学は、インドネシアの東部、スラウェシ島の最大都市マカッサルに立地しています。

スラウェシ島は、アルファベットのKに似た形をしており、面積は日本の半分程度もあり、人口は約1,700万です。主要産業は農業や漁業で、とりわけカオやコーヒーがたくさん生産されているそうです。

インドネシア東部有数の国立大学であるハサヌディン大学とは、平成26年4月の大学間学術交流協定締結以降、看護、栄養、デザイン等の分野で交流が進んでおり、教員の相互訪問のほか、平成27年11月には、同大学の学生民俗音楽舞踊グループを本学の大学祭に招待し、公演や学生との懇談、ホームステイ等で交流を深めました。また、平成28年4月からは、大学院博士後期課程で留学生の受入もスタートしました。

更なる交流の進展に向け、9月に現地を訪問して、多くの関係者と様々な協議を行いました。そのひとつが、大学院での留学生受入の拡大です。副学長さんや学部長・学科長さん等へのご説明に加え、今回初めて、大学院生への説明会も実施しましたが、かなりの人数が集まり、関心の高さがうかがえました。

私がスラウェシ島を訪れたのは3回目ですが、それまでの訪問も含めて、同島の魅力をご紹介します。マカッサルは、周辺を含めても人口が200万ほどしかなく、また高層ビルもごくわずかしか見かけないことから、ジャカルタやスラバヤ等の大都市と比べ、のんびりとして、落ち着いた雰囲気があります。海に近く、緑も多いためか、毎回さほど暑いとは感じませんでした。



食べ物は、魚、蟹、海老等を中心としたシーフードが豊富で、実に美味しく、いつも堪能させられました。今回は、「SUKI」という名前の鍋料理に挑戦しました。「すき焼き」から名前の一部を取ったのではないかと思われる内容でしたが(でも通常は牛肉が含まれません)、日本人でも食べやすい料理でした。

ハサヌディン大学では、地元の産物を活用する形で、チョコレートを大学で製造し販売しています。パッケージのデザインに関しては、本学も協力の可能性があるため、工場だけでなく、大学のカカオ農場へも、デザイン学部の教員と一緒に邪魔しました。その近隣にはコーヒー園もあり、生まれて初めてこれらを見ることができ、とても感動しました。



マカッサルは、赤道のやや南に位置しており、年中夏が続きますが、車で2時間ほど登って行ったマリノ高原(標高1,000m以上)には、避暑を目的に様々な別荘が点在しています。この地では、やや冷涼な気候のもとで、岡山県新庄村の協力により、有機農法による米作りへの挑戦が進行中でしたが、米の生育状況はまずまず順調とのことでした。

3回の訪問を通じて、マカッサルの人々は、皆さんとても穏やかで親切であることがよく分かりました。大学間をはじめ、国際交流では、やはり人と人との繋がり、信頼関係というものがとても重要になります。現在総社市で生活し、研究を続けているハサヌディン大学からの留学生も同様に、本当に礼儀正しく、他の人の気持ちを慮る態度を崩しません。先日も、彼が日本語の指導を受けている先生が困った時に、直ぐさま自転車で駆け付けた、ということがあったそうです。こうした温かい心を持ったスラウェシ島の人々との友好交流を、今後とも拡大発展させていきたいと考えています。